

出をまとめた用紙に、互いにメセージを出し合つワークショップも体験した。「家族がなかなか相手をしてくれなかつた」と振り返つた子には、「一緒にいて話を聞いてあげたい」「遊んであげる」などのコメントが寄せられていました。

仲渡さんは、仲間からメツセージをもらつた感想を聞きながら「子どもは受け止めてもらうと、世の中が応えてくれると実感し、アクションを起こせるようになる」と説明。「子育ては親だけの責任ではない。社会で子どもを受け止める必要がある」と呼び掛けた。

授業後、糸政口君(18)は「子どもは大人を選べない。大人がしつかりしなきやいけないと思った」と振り返つた。もうすぐ大人になる自分にできることとして、「何でもさせてあげられる大人になりたい」とほほ笑んだ。

授業では県雇用政策課の神里学主査が県内の就職状況などについて説明。生徒らは、中学生が手にしやすい情報誌のアイデアとして「表紙にアイドルを使うと手に取るはず」「買い物袋と一緒に入れるといい」「週刊漫画とゴラボする」などのアイデアを出し合つた。

門林教諭は「夢のバトンプロジェクト」と銘打ち、3年生全体で事業に応募した。助成金がもらえれば、生徒で事業を興したい」と話していました。

## たんぽぽのタネ

# 幸せ見つけた台風の夜

神村 さゆり



同コンテストには全国の中高校から52作品の応募があり、今後も自分の足元を見詰め直し、アクションを起こしていいってほしい」と激励した。

優秀賞に輝いた(前列右から)興儀君、富里君、橋本さん、照屋さんら=5月26日、県教育庁

今年は台風の多い年かもしない。台風2号は見事に大当たりで、約30万世帯が停電となつた。我が家も例に漏れず夜半10時すぎに電気がストップした。

この台風は危ないと思った私は、事前に子どもたちに懐中電灯を用意させていた。子どもたちは「停電してからでもいいじゃない?」なんて陽気な返事をしながらも電池を確認し、携帯電話はフル充電し、ろうそくとライターを手元に置いた。

いざ停電となり、何も見えないことには驚愕した台風初心者たちは、私の忠告に心底納得した。

朝になって、天候は晴れわたつても回復の気配のない電気。家の周辺の掃除に追われ、ご飯を炊くのがおつくなつた。昨日の残りご飯をおにぎりにし、足りない分は非常事態に備えて買っていた食パンを食べさせた。

「お母さん、チンするね」とオーブントースターを開ける娘。「停電しているからチンできないよ。魚臭くなるけどグリルで焼く?」。しばらく考えて買っていた娘は「やつぱりそのまま食べる」とトーストをあきらめた。

この一連の出来事から子どもがもつと幼かつたころを思い出した。電気が消えたとたん泣き出し、ろうそくで明かりをとつとたんほつとした声で「ママ、テレビつけて」と言つた事。

台風の日は無計画ではあつたけどキャンドルナイトだった。ろうそくの明かりを子どもたちと味わつた。

ふと、子どもが漏らしたひと言。電気は止まつても、水とかトイレがまともに使えるつて幸せだね。その言葉に小さな幸せを見つけた。(沖縄アーレギーを考えるシーサーの会代表)

# 祝! 第48回ギャラクシー賞ラジオ部門

